世常
仏法

演世万物法義

乙

叢書

共五

遠13
602
上

瀧口氏藏書之印

遠へ門
652
巻八

芳塘文庫

渡世身持論義　五之巻目録

第一　罵て排つく利実拓る遣女が返答

弥陀如来ハ枝の紙子と脱て金色の肌と現ぜ

明治三十八年九月十日購求

比丘ハ

扨女と分るこそ慶い高人の居と偽よ同じ所そうつれ世渡りの所作偽ら不ハ金箔の法よ蔵る法問論しの要

第二

如意八間美を抑さすれば高いの高を称

世間

色と離れ抑まの親によい樹の
黒をはくろうよりよりの女房の方
使しけいどいと宋てなどの燈を
悔よ吹てあるよりかたれるよと花と

第三

法高ひ称ふ男の二位抑れの二色黒し賜ひ

世間

御ゲ扱ひハ花色門の法滅を補
働き藝い芸の稼ハ百八ふ市
所の栄久てき世界は法豊
ふ人をのまゝ

法世身持作義 五之巻

一 岩にくくちつく抑を遣女ゥ返答

世界の男とゆ岩ゝくく晩よさげるわどに万人を一のこ花る
功名れ遣女ゥ りんぐらふ数ゝて。さあ今をとずに高ひとゆや
ら毛ゆるのこうさにくりいさわひ猫よのもれいさすゥの姑未人
し今をとずふ高ひとするゆこのふ実にに岩ゥ。猫稼して
尺くくれいゆこの抑まるひ神をとんでいきりあしさわひ返答
らん。岩岩をうくい風の抑れ衣ををいどこらの里れつら抑よ
すゥいどゆどくくとつゆくくるゆりは法人ハゥもさゆ抑ゥいど姑
未人を抑岩ゥ。ゆくくゆくく岩ゥ抑るハいゆをくゆ抑ぶゆさ。世界
よ今をとびして高ひするりのハなゝ。ゆ已釈とゥひ食品せゝ伝
ひゆめる高ハ傾嫁ゥひ法猫負ハ。法世のさゆゥ。高業の姑ゆれい。

無性とのべて一向に高貴のる性をおそれるの仏法と始末の
所のうつをうる我くこそと制せどとていろさ寄つめて無ふて陸地
しの法の流れ流海しに永く困しむ災害と脚ろの世界仏法海ら
ぶあぶひろ拡無性のうふ紅ふ無ふ性をめく
いまらめ仏教とせざるやれ教と云と性べいこいて時我ふるの立流より
しのるの所いしたの教業と大るのいけそおて今迄とこて拝ろあて仏性
と使命と業しせるれ仏のさ海ぶげするい解るし海ぐ海ぐるこのふら
いるとと大事にて無性といまらぶ為とおるると教知しひるめいしい
仏教ふの内代するあきるをとらるの門すひる事とめて一廓
の事ぶ百八煩悩の除教と切て法ふさよく。遊女を和尚ふうと
ふて名ろいるとと大るれいけて無性とさく教いるらの為ふへ
仏法大せるるのいるしの立流いせるのの内ぐるれ教ふへ内

嵐くおぢるるる。家教を進せて実字の無仏代をに教とて与ふし。
教業に依く拝ぐるのにかていろきを業とすらそとるいめの教と仏教
仏ぐ拝業為の為自と為ぶんや。有法上人を新て安ひ。我ふるとる
ざるくい言下の無学てそちらるふよい教業と体害にて無性を制
する教いなるる。遊女ハテ人ぐるる無性とふいしの高貴ふそれるる
しふる自ふ必法せのるふりるふいかる人をとふらるひすさいふらの
里、いまのきそも求ゆふよ教業と法みてめそぶるるとやる性の出る。
色ふる仏の家とすめて色のは者とする性の出る。
いれの者にも仏ずくいるせふそんふ家仏るる
やふて女郎の問まするとは性。海ぐきの邪ふ教業の未業と研で
ぬふとふふて。ふふんとするいわるどや海ぐ教とやるぬ対い教るふの
耳入て合止て武い左の柿のあにるるつけ。ゆ力れとるて。何者する。

あのさうんぶ
えれさく
きちがいよ
あうういよ

いそ
らくらくあんな
れ
おとるさん
れわが
よ
おれいれんこ

元信のゆへで。人間につよい縁あり。そなはる兼略をて。我おとつるて
ねゝをねるまをこゝ侍ゞる女郎ゝ。ひとしをとる。ひとをする。海い役目をすゝ抑
けいせいの身い。笑てき釈のゝよゝまゝくうれとするゝ。釈くて。栄耀
飾よゝゆるゝわゝど。浦せのゝゝよゝ大切の女ゝをて。ゝゝ人をと出し
出つゝそ。はゝ。ゝ業のつゝあと。体男にて。揚屋よゝごゝゝゝゝ。ゝの
ゝ釈ゝゝゝ。全ゝゝゝゝゝ。ゝゝゝゝ。ゝゝゝゝ。

ひすこ蓮の葉と染めて彫りて色素に仏とつくさるとぬ命の同美粗
ひとい一ばすずさらの里へ到れば指事と人の器づりといくづのちぐひ
そのくは高ひこれにそとぬぐ蓮和ようなそ蓮人をとぶぬ
移れよそを蓮とうて蓮に蓮ゆ仕仏せい年く高蓮和てよ
石ー寺作刷をそれのへゆるずやぬ仏と高人の高和ーいう。蓮命の唐蓮
するもそと同ぶとして指とまそに立て仏と高蓮高蓮ぬ仏。今宿指
ねそ蓮の物ぬふく神なとふずうくと今おさね人ちとそぶなく
わらひ人ちりかぶすしぬ蓮ハよけまで指ちぬ。撫よつく蓮命ぬや
と。鄙一そよ名ぶふくなそいぬひとちやりぬて浅よなんぶ蓮さ
よ。悩のふい徒白の指人よい蓮あぶくとしてんくぬて指とけてぬる
が。別高ひ指よそとかざる格そぬ指ちうの左蓮と活ありとよりるよい
くれて今蓮ちくさき指ぬうしぬぶの指とて名とそれいうとさもを

こびよんあとそれてもあけんそあの方俊ぶさう所うぶけてまる事社い国金の
高人あとつして蓮指仕まる高国蓮の代、追服すると同ぶるで大仏蓮の
ひ左指おが高人てちうひ。新てすとそゆんぶうぶ付すあた役日
しぶ浅ぶよ蓮ぶ高ぶよあるう高蓮くあんぶ国仏で小神お縁とてあぶ
しの高ぶもいくおぶくゆそやうぶあの高あでい付ぶしそもあぶそて
指ぶといぶあのそこぶやぶ。高ひの蓮人が叩蓮の去と神ぶするとほど
格そぶあとして蓮そおの左蓮れよるぶさんぶまそすあてんぶるゆんよ。
ぶいれ高ひもそて。粹ぶかぶるれれ日ぶもとおそぶいぶかあんけもちんあよ。
指ぶういそ。新のふでい頬ぶうでもさそ。出人の高蓮の左ぶ高ぶもと
あぶぶそ。八百やのちんもそも行そて指ぶそとけぶあつんれんと蓮高ぶまい
左蓮れと蓮、ぶざれ大ぶ高ぶこのまのどよんぶ指ぶてんぶるゆんよ。蓮命のは二
四千五六そ高そて新ぶうんも法とつけ。ぶ月も蓮日あさゆんにそゆり

業医の家の二代目は古世さんに小刀細治の術を揚げ代る
しにまんべんなひ。江戸古来の尾張さん。腫瘍病人よ分とは色郭法
新所の名医さん。産婦くらの名医。秘伝さひとはさせ。七法の丸と称全
これ。非人と知るべきやうでもんちゃ。医よりこれにても悪れ。
元はまと知ると名をとりて。多くのよいあとしらけて。対を寄んるの
高ひとてとつすのいて。ちゃくを医業と称略する。悪性者といえ
なり。たとへば不仁て来る。教医者の法の多くの丸薬移り来と
ちらへ考合毎年。薬法と来て。十法元一正日二のの中びの。知
ちらづきの方いてなど。薬やの家凡で。極けて病る人。
子たちづのでは。しろよりる人。後湯でひとよ入る人の名西
ゆメたおいて。〇て手付をる一回知人の所。おど年を長へなげ
ぐ〇ちひ。ぐてまつるれ。ひ。れけける人。多い病人をけまど。

金糸の病系、又あて医者ぐんさくある。ようてよりなすはよりぬ。
くゆ中にて美代元。一部しるあぐ。ふらは長ぐふるゆくるので対あぐ。
して我のつて。ろまれひするいひ年むの移り来と同るぞ性知とよ
時とせれて。ふひ元とれくさあの高ひの泥泥とつるのでござるよ。ふ
楽して又ぐ。こまゆうての月ろれと無びしちぐよの男ろふ人物ふ来知
一の名て来るゆるの男い月あぐ。て。の月来にあるのでござるぞ。ろま
いよい高ひとせふあの様をぞ。ござるく。ろ名と称しぞ。みの流るゆれ
あ。ぐれ。ぐれい。独元の面くれくとん。人まを又くり

㊁ 世ゆろまに情とれさ部に高ひのを称

力とも人ぐて。人の系と性ふゆ。生元の中れ。ゆれ。ゆれ系とすれ
て。殺ようする社色。系ぬの。れ。ゆ。ひ。ひ。ひ。ひ。ひ。ひ。ひ。ひ。ひ。ひ。
ならるふひぐろ。ひ。ぐ。ひ。ぐ。ひ。ぐ

太夫織りごみて、太方のま様ハ法ゝ服して、ねりてすぐさまさぶのゞ色
まハさうしぶそつくるの上ゝか。成人のひすうに化さんねり回ゝ人ゆく
ゆらの上ゝ、ぎ、ぶのうれどゞ絹ゞのまゝ〇く佐ゝの天来と云をあ
いさんゞのゝ。刃あゞりてのゝ多まゞるひゝやぢゆわゞ絹方もゆうてゝ高
るの方後と合ゝてゝおゞゞらにゝ多来とやさゞあのゝ味いせ海ゞき事
うゝりぶゞあゞの打樫をゝうゝいそいゝふゞそゝとゝケはとゞめ。佐ゝの三里
ゝ深ゝ月ゝ男ゝくゝゝをゝりてゝ。ゝいゝ海ゝゝゝてゝもゝ多ゝまのゝゝ打ゝゝひ
切ぬゆゝゞゝ寺のゝ中ゝゝゝゝゝ。ゝ変てゆれ。武いゝゝゝ合ゝ多ゝや
風ゝゝゝの精ゝ変ゝて。垢ゝゝくゝゝきて。ゝゝゝゝゝゝ。ゝゝゝゝゝ。
絹のゝんでおそゞゞ女房ゝゝきゝゝひ。ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ。
そゝずゝて。絹ゝゝ。ゝまの。ゝゝ男ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ。
ゝゝずゝゝ。ゝゝゝ。ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ。

ゝの淵ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

大笑のあまりの事にひとけて合ちこゝあぱるを合と分わうの侍
張の方へやうでぱ身あぐらいの伝のうぞ乃まぐひの毒ぱちうをれぱう
く合つゝふまあぐもいぱ大笑の毒のうるがゝせらるゝ乃まの雑合とあと
つすのうれぱ不と清ひ怪ひものにあぐ乃ぐうふのうにていぱ教えを
負ゝ名付。方住あの才一とせらゝくはぱ方のうまつゝそい術たいひ偶
ともひて人とたぐうさ毒後とえてこ後ふてのぞにぱつゝさ毒ぐ
のの毒吉ふ迷いられて。毒ふあくやひさ侍紙の測よ法毒ちゝやゝな。
身ののふあ面くの世界仏はのさはぐぱあぐと。往生の事とかうて
示りあくい。那波九郎ぱ殺上人ぱうぎ出ていてよる毒命の内法ゝ
すひわて。毒氏のうのくにうせんがあるよすに兵衛の親文ゝ邪
たとふるぎ。毒方極楽ぱ往生せるゝ。みちびくあの方住の仏毒ゝ
しめかくうをゝ毒名と付るうりうさはぱやゝらとゆゝるれも

ぱよぱたとたとけうゝ毒方れぱの品にて毒ぐさゞ世界住住ひう
めうゝ毒の中に毒月色いに栄雑にゝぱ。ぱにてうに住引てゆさあう
海とぐきてゝうぱ教ゆとうまぐぐさも面毒方より極楽の毒と
ぱ住ゝるぱ。那先るけきぐ性面人とぐさゆうゝるゝ極楽の住ゝふ
こうゝ沢の毒後ゝとたとれうま年あうぱすゝと毒れものにはうて。
まぐうゝ毒詩ゝあぐゝこうの里でうゝてぱあ人用ゝて毒につぐたゆゝに。
世るゝぐうとぱ住ゝ。そにはゝて月代つぐれゝとうの三にゝて仏方のうゝ宗
門きぐと付るゝうぱ教住毒ゝもわゝとゝ毒ぱゝるゝ毒ぱ人ゝうゝさ方
毒ぐいうゝ。ゝのゝ住ゝ衛とゝうすのぱ三泥ゝうゝ人ゝうゝぱぐうゝつのゝ毒を
ひうゝにいうゝもいまゝぱ。ゝの命ぱ人毒にてうゝぐぐぱ。ゝさ方切ゝ人命と
のぐうぱ。極ゝ毒のぱとゝ毒不とゝいひけぐて。命のせんぐゝに毒ゝるゝゝを止る。
極ゝ上人ぱ。人毒にて住命とすゝうゝゝ病ゝぐぱ人毒代の紅を惜んで。

同あるは教ずぼそ〻せる今紅と爲の二ゐ土とするに花紅の病人とも
すくひ方のうへにてつひにたすけるとなて爲こゝろにいあるど
やうけ湯てを去同治ひ物多姑事で毒ゑを抑人程ふにも出さ
ずゐるへてゑにぞそこに口まのひせうの方財銭兎程人の目をつける
紅裏い姑末の眼よ火婦こ子く。方の抑ものは人ぐ。ぐ紅
なるのとぞ。ゐ白ど。ゐの姑末しと。身末つるぐ目ら。ろ法の珠
教と切て。ぞくゐ。ゐふのゐぐゐにすゐにゐぐひ。今紅とるげうく。
傾国世ゐにゐ。八幸のゐぞんにとゐひゐれて。艶新よ。ゐと教し。
容色蝉脂せよ。ぐひゐきぞ八十姑姑よ三十二相をゐ。ぞ。ぐれ
姑年に国続ゐれ。今のゐ。ぐきぐ紅の弓鳴。七夷の祝ぐゐに教者
姑末の教と。ゐ名書の退風よ海ゐ。て。紅男よ。ゐ紅教主社ゐ犬
陸大奥のはきぐんの構とれ。玉の第階よのゐり。ゐ爲の楽ゐと

きゐ。ぞ小面西の聖家よ。ぞ。ぞあ仏。頻仏のゐ。ゐと出てすゐ。ぐ。ぞ法
上人仏面ゐ。ぞ。ぞ。迷ゐ。ぐ。ど。面ゐ。ゐ。ぐ。ゐ。ぞ。ぞ。ぞ

ちゃあるつぼ出来て金箔の地蒔絵
ちゃ小判と豆まくゆゑにちなんでなるべし
ちゃ俗にいう人の間ハ元亨のものゆゑ
しと名付けられんといふれ也とぞ
の茶ぶくろつぎて人ハ面をさらすゆゑ
仕合ハ水へ入めぐ矢止さの結束のすゑ
ひろの是ぐわつそ四まて一ハ楽にて中ちてゆゑ
と金箔とまき付てもゆ金ハ無かくまひすくろとい花ぐさの
結るしいぬ結束のとこをつそ足ねそ
ところあて打ちてゆ言めの大臣とぞ
と結束の法の四人席と打ちもうけてとひ入いぬ何れ色門女大
和四色ゑ乞出ぞ法ハ閉口とうてくれいぬ色の法まる一ハ為ハを

ぐぐぐぐて結色門のハ法ハ閉口とうげ前ハてぞのうりけ

三 結高い結束の店拵れ方ハ色のふぐろひ

結束ハ法の人ハ席ハ重ねうぬ法ハ閉口ハ
ぬ法ハ人ハ席ハ重ねうぬ法ハ閉口ハ
なる結方のあるとそ結て閉口ハ法ぐろ
結束のくるの結束ハ釈ハ結ハ
ぬて所方の茶ぐろのつりハ及ハ
ハ閉口ハて結ハとハて畑と結ハ
面ハのぐろ結ハとまたハ
とぐぐぐぐハ法の結束ハ
ぶぐれハ法の結束ハ
まぐぐハ法の結束ハ

天下大平
光明編

中伝はこれを独受伝うけ始めの中ふ
あるいは武者ふの三流の極意もそなはりて流儀のみよりふるてもと
つくりかたをまひうるしぬりこそ安心楽なのあよ
いていうるはこれをふに身をとるげらつくりてゆるに達し
とうがとすくうんとも也ぞ又は奥とろとの出さげをいそのくさの結束
ふのゆしにかねてはしうるあるは商人に美を釈ものしば侍害ようん
うとうるさげりてもつけどこれでもいまだ稽でもうとせるのよいはに。
帳ばらゆるはとるむごの人もあるこれ。いまを四さつてまもやものを考て
侍はこそ有さ有くの那癖といいてつぎあ一様の合力もあ合
わあり。ちろしいとろふいろむごきたみ。ちされた一流よいはびに。あ
絵はあのこふ絵に指者すしいて。弟方に稽頁りあく。技業しゆる
ゆにれあるしひ。えを今のみを高をちろよ入てよの程とい。

程をあるあるゆ人よ。弟をれ。あて先いのくいり人ふなる方代お通
の程ふとるけめを。ふ流よりは侍色ーのおを毎ーに。おを紙ふ百要同
よううのふうまいーの要いたを実獄の中本近よあるど。ふるメな
まその方体ゆれ石せい実獄とゆるされ。あ要同をの人囲世石
のーをるいをるのをれもを紙ちば。て。拓合の人いをさを同。
今始末を人の伝はをのぐを毎て。近年世を方体す年はゆら
ぎちに。大ふの伝紙をて。伝教くめ。人ふも技をるけ。を方を邪民
ゆるいふ流を人の学自をいに。を分ふ初ふるさぐき出。ニ初ふ初の利紙
る出ーのげ。紙只学を人伝人の邪民をいるは。ひく技をと極めおら
ちをうはいを四ましびーかず。ふ所ふをのしすを主も深入を。紙る
四は紙方のをふをとりのをとと年小伝りをてあるひをれいぬ年を
人のをあるく波の命をとをしをいを。せちとを人で加ふぶちん移ぐず。

ゆくが吹雪に紛て行くし三枝庵にて茶けらすすめ聊茶
なるゆきの一里にくぬるれば屋つまげて行ぐ客と人
間和尚奥字堂の老から家よのうぶ才一のつくるれ一つ方ぶび
れあつひ深入ぶけとえー宸戸にから家のすいるのゆく山すき
とわ射しての白そ行ぐー老ー紀くのう間ふるかるうれば水
系かるぶと始末のうあつうい和尚和尚家
の名間とすぐと元とうつあるひの紀猴ぐーで元猴和侍あつて
事すーいうう元はよって拾ら門の女大和る主ぶ西ふる一礼ーく
廊院よゆうのひうつのあるひ和侍ーんぶ元ーよーぶ武
ふいうーえ紀ぶいの武の武面武ひるのふ武ふと紀行うんぶ
ぐの武里の拾武ー異とつうーぶぐれ拾入の金ぶとあつぶは
の里れ四ふ紀ぶ紀ぶふ武ふ武ふ武ふ武ふ武ふと向

御ふのあいすの長のつるとしふうぶ武ふ武ふまかぶとうつひあうふの
拾ふとちひとつうぶとかぶうてだうやふんのれまあれうる荷拾
の紀どふというぶあふもがとすめこ和尚建ふのふかよいん
せしゆきうふなうありすすあうあうい和およふふの長ふ米付ふ等の
武ふ武ふの岡ゆふい武ふ武ふ名うふん日ふ武ふうふ武ふうのんふふふるの
武ふが武ふと岡て米付長のつるふゆうふさゆ武ふ紀ふとひするのあふて
伝ふの白里ふうの拂灯い冨の林れぶく拾ふるもふ及ふ武ふ武ふ
うひ武ふの冨師ふふて武ふ紀ふ武ふ武ふ武ふ武ふ武ふ武ふ武ふ武ふ武ふ
世ーい和ふうゆうてとつれて武ふ紀ふ武ふ武ふ武ふ武ふ武ふ武ふ武ふ武ふ武ふ
の口ケの白和ふ武ふ武ふ武ふ武ふ武ふ武ふ武ふ武ふ武ふ武ふ武ふ武ふ武ふ武ふ
乃すふの武ふ武ふ拾ふ武ふ武ふ武ふ武ふ武ふ武ふ武ふ武ふ武ふ武ふ武ふ武ふ武ふ
て疏ふーあ白ふの乃ふ中ふ八ふふの移ふ位ふ武ふ武ふ武ふ武ふ武ふ武ふ武ふ武ふ

始末宮ゐて学及びたりしかども今度ナ宮遊二付吉とぼめ。
相世と不始末の高すし倹約多服始まのはと示ぶ。水く而この家
をたゆつ四ふにゆまく教を伝でしと。也者所土義法よて。猿光寺の
出家と用性わる猿よあらぐい猿などひろ欲のはよちまけ乃
紙のつるとしらろ。ムサぢ人の手あ上ば猿をせてひすび付。若者
の若患さのぐゆとろ。てしのひ多用と。ろ仕をれ世ゆ
ちゆ。廣大会ろこの所ろちびまこそ。ぐさ仁始末と人の方法と
人ぐろく。番場きとたふ。九九と唱へ八条の初教を出し。貝一
条次のれを知。作九の一と唱へ。ゆ一信一の手紙のしまゆ。
前年のぐく教よ場月ゆ始形集ーてゆ。くれ世年れ法
紙名ぬをでドけ。梅法高貴結婚のあよ。始末ゆ法のあ
よへ代く作りの家地と始ゆ世始末と人の方の手紙へ。

一守也者の掛盗枕年ハ一刀これの初ゆめの切ゆし大条
の高ゆ法て。精を自よへよちあに菜に乗ひよ。の始末乃
をこへのみよ紙さしろ。決よ云利と日法ち関分和るの。十二月半
のゆ。華の兵袋と始ゆ也。地で本ゆ。びいを西の猿の毒
とらちゆと。一切高ゆ。ちろ。六月中も立始と。たにくゆ。
紙いど。ゆ高くより勝と出され。伊信よ始ってせ人市路法うし。
小猿ってろ利ととろんと。ゆ歌人いらよ。よって市猿とむとび
ゆくられ人岩市大仲の名ん。ぐ。の紙の名地。古の仲よゆ。きい
つきのゆるいゆ。ゆいの名分利。そ。行きに法。ぐて。弱。とろ西
どけんぐ。に法。と。は梅の洞とてびさし紙。学に作の学に
十紙の名成の名ゆ。ゆ。ゆるのるにゆ。ゆ切。いつ人ろうとの新。
梅ゆ法と人の什ゆよい。古地のも者のる魚人の小判ゆ。こ宗

古法の用とせり世古稗おも丸也者の祖らずくさぞ世代の百姓人
の名傳を おれ 著書ども 昔より今拙い 減四を してたまち
ぐきあるれいぶつ ぬるれいあぐ 一枚 つひ ぶ ぐ ぞと 世常 部 人 見 人 見 後と
あ ど 伝 と ら れ 々 れ い 伝 高 人 後 よ 者 ぐ 伝 け る ど 感 涙 と る 。 面 く
ほ は 大 事 と そ れ く の 紙 と つ て 新 と ち ぐ 和 高 ー 裏 店 ぐ ら と 分 ま と
ち ま ば け て ぱ ら そ げ く 々 れ い 名 ま ば ら の 名 ー の ち ら ひ の 新 ま る 。 四 九 あ
ち く ゆ ち ま ち と 四 は 用 村 と ち ー ま ず 。 又 報 者 後 あ ま る ひ 野 栄 ま り ぐ ま
き 世 ち 伝 ち の 堂 と ぱ 伝 ち や と ち ー ま ち く 拵 ま ま ち ー ひ 面 て 。 れ 代 も
者 後 ー 。 今 ま ち で た る れ

浪世子打作義 文 著作

寺町五条下ル町

享保二十年 卯 正月吉日

菊屋喜兵衛板